

日米医学医療交流財団 留学助成

A 項 研修報告書 (平成20年度 助成者)

作成日 平成21年7月31日

氏名	中西幸浩
研修先機関名	マサチューセッツ総合病院病理学教室
研修期間	2008年7月24日—2009年4月30日
現在所属機関名	セントルイス大学メディカルセンター
分野	病理部
役職	外科病理レジデント
	<p>米国ボストン市のマサチューセッツ総合病院(Massachusetts General Hospital. 以下 MGH)病理学教室の informatics division にて研修を行ってきたので報告します。MGH はハーバード大学医学部の主たる教育関連病院であり、臨床および基礎研究において世界をリードする病院です。</p> <p>まず、informatics に関して簡単に解説します。Informatics とは computer technology を用いて、data を information に変換する学問分野です。Data をいかに acquire し、store し、process し、retrieve し、analyze し、present するかを探究する学問分野です。Biomedical informatics の中には、bioinformatics, clinical informatics などがあり、pathology informatics もその一部門です。Pathology informatics には、computer 画面上で組織切片画像が実際の顕微鏡を見ているように拡大及び視野を変えながら観察できる virtual slide や、virtual slide を使った遠隔病理診断支援システムの telepathology などが含まれます。</p> <p>私は、MGH の informatics division において、computer を用いた病理診断支援システム作成に従事してきました。本プロジェクトは現在も進行しているプロジェクトであり詳細な報告はできませんが、自分が関わってきたことに関して概略を述べます。私の仕事は、今までの長年の病理医経験を生かして、computer に病理診断を教え込むことでした。Computer を教育して、computer に病理診断の手助けをさせようというプロジェクトです。MGH では年間に 3000 件に上る乳腺病変の生検及び手術検体が病理部に提出されており、そのうちの 1500 件に関して、training case としての annotation を完了してきました。1500 検体内のさまざまな良性あるいは悪性病変を computer に教え込みました。本プログラムに主として従事したのは、病理医の私と computer システム全般を管理する engineer 1 人でした。組織標本をまずは engineer が whole slide scanning を行い電子画像化します。その画質をチェックした後、私がさまざまな病変に関して、computer に病理診断を教え込みました。さらに computer 診断の精度を高めるべくプロジェクトは進んでおりますが、現在進行中のプロジェクトであり、これ以上の詳細な記載は控えさせていただきます。</p> <p>MGH では、上記プロジェクトへの参加に加えて、病理部内で行われている grand rounds やさまざまなカンファレンスにも参加してきました。</p> <p>MGH での研修を終えた後の現在は、セントルイス大学 medical center で外科病理レジデントの 1 年目として勤務しております。日米で疾患の種類が大きく異なり、また specimen の processing の仕方も異なり、いろい</p>

	<p>ろな違いを学べてとても充実した研修生活を送っております。レジデント終了後に <b>full medical license</b> および米国病理専門医資格を修得した後は、さらに <b>fellow</b> として研修を積み、上記 <b>informatics division</b> での経験も生かして、世界をリードできる病理医になりたいと思います。</p>
--	--